

春より夏へ（十首） 賛助員 堀尾

トメ

花咲きぬ吉野の山に嵐山に村の祭におのかこゝろに
圓熟かさては墮落か秋好む我はいつしか春を歌へり
温き母か愛にもにたりけるおほろ月夜の影の嬉しさ
麥畑になけるひはりも暖き翼にくゝむ母やたつぬる
喜ひぬはた戦きぬわか草に我か教へ子を較へける時
共に見し花を手折りて奥津城にわかゆく道に露のこほるゝ
瓔珞のかたちも嬉し石垣に蔦のわか葉のかゝる古城
さぬぬきて立てる籬の新竹のよに涼しくも思はるゝ哉
情のみと思ひしものを理知に富む人とも見ゆる我楓かな
榮えゆく青葉かくれに衰への己か心をいふかしむ哉

雪

恨みなく執着もなく雪のこと消えなん等と思ひけるかな
春の雪うるほひて降る窓際に物語めく物思する

梅

咲く梅の香にも匂へと三年まで物知らぬ身の人を教へぬ
學ひやの行くさ歸るさ我道の探梅めきてほこらしきかな
ふさはしくもはたつきなくも見ゆるかな禪のみ寺に梅の匂へる
名ところを尋ねつくして我宿の盛すきたる梅を知りけり

川尻遠足

（川尻は熊本の南郊貳里半の所に在）

途中にて

未だ淺き春の光にわれ立ちて限り知られぬ思をそする

見渡せば阿蘇の高根は白雪の積れるまゝに霞立ちけり

大慈寺にて (曹洞宗の巨利川尻にあり)

教外の大氣に高き山門を仰きて悟る禪の醍醐味

大慈寺河原に舟を待つとて

川のへに渡待つ間は春の日もしつ心なき心地こそすれ
春の川なこめるわたり母と二人住まはや等と思ひける哉

水前寺に道を取りて

塘の道流るゝ水に踏む草に春の光のみゆる嬉しさ

黒き帆のふねか音なく我むねのとまりに入りてさみしくなりぬ
我性とあきらめ言にいやはてはかへると知れども思はるゝ
かゝはりもあらぬか如く黒き字のならぶノートに湧くまさひしさ
何こともすくればかへる一すちの夢みるものを何笑むや君
銀いろの小簾にさしたるすきかけの夢の象に笑むあしたかな
年ふれはいのちにかけし一つさへ夢とはかなくきえゆくものを
矢車菊の紫みればあさあけの夢み心地もうれしはつなつ
銀色のものゝけはひになつのは月をみるさへものかたりめく
夕かほのかの下かけにころころと蛙なくらん故さとのいへ
水なつきの園はうれしき飛燕草おいらん草に夢多かれは